

◎〔投信ウオッチ〕「オール5」は3本に減少

リッパーの4評価基準で

10

20

30

リフィニティブのリッパー評価対象で国内設定の追加型公募投資信託（上場投信など除く）のうち、2019年10月末時点で「総合収益性」など四つの評価基準（リッパーのリーダーズ・スコア）で最高位の「5」を全て獲得したファンドは、前月より2本減り計3本となった。4本が対象外となり新たに2本が基準を満たした。オール5の3本は、いずれも株式の配当利回りに着目している。

10月の世界の主要株式市場は米中貿易協議の進展期待や英国の欧州連合（EU）からの「合意なき離脱」への懸念が和らいだことを受け、おおむね上昇した。

新たに加わった2本はピクテ「グローバル・インカム株式」シリーズのうち、ともに為替ヘッジがない「毎月分配型」と「1年決算型」。電力やガス、水道、通信など世界の公益株で運用、利回りの高さや相場下落の影響を受けにくい点を特徴としている。国別では米国企業が6割強を占める。10月は米長期金利の上昇が逆風になったが、為替相場が円安ドル高基調だったことがプラスに働いた。同社担当者は「世界経済の減速懸念や世界的な金融緩和の動きを背景に、国債などの安全資産の利回りが比較的低水準にあり、公益株の魅力が高まっている。主要国はインフレ率が低く緩和姿勢を維持しており、公益株にとり引き続き市場環境は良好だ」と話す。

フィデリティ「ワールド好配当株」は6カ月連続でオール5を獲得した。スイスの製薬大手ロシュや英・オランダの食品・家庭用品大手ユニリーバ、半導体大手の台湾積体回路製造（TSMC）など大型株を中心に運用、割合は小さいが日本の不動産投信（J-REIT）も手掛けている。運用担当者は「8月中旬以降は株式の中でも相場全体の動きに敏感なものが好まれ、配当利回り重視のファンドには相対的に不利な市場環境となった。ただ、一部の組み入れ銘柄の健闘があ

り運用は総じて堅調だった。世界経済の行方は依然不透明で、引き続き中長期の運用を目指す顧客のニーズに応えたい」としている。

リッパースコアは、類似のファンドと比べて配当や値上がり益からの長期的なリターンが優れているかをみる「総合収益性」、リスクを考慮した継続的な収益面の観点からの「収益一貫性」、元本維持からみた「元本保全性」、低コストかどうかに着目した「経費率」の4項目を評価。それぞれ上位から20%ごとに区切り5段階とし、最上位を「5」、最下位を「1」とする。3年以上経過したファンドが対象となる。

（注）ランキング対象は国内公募の投信。単位型や確定拠出専用の投信、上場投信、マネー型投信、公社債投信などは除外した。リストの並びは上から設定日の古い順。